

しろあとだより

第15号

2017年10月

高槻市立
しろあと歴史館

目次

「一条家(撰関家)の家来所用の米国S&W社製ピストル」	千田康治……………1
「撰州高槻絵図」に描かれた高槻城について」中西裕樹……………5	

一条家(撰関家)の家来所用の米国S&W社製ピストル

千田 康治

はじめに

しろあと歴史館では、平成二十八年三月に、辻本光彦氏から、十九世紀に製造されたアメリカ製ピストルの寄贈を受けた(1)。辻本家は明治十五年(一八八二)創業の老舗足袋メーカー・福助の創業家で、光彦氏自身も社長、会長職を歴任された。光彦氏によれば、本ピストルは莊林維英(しよばやし、これひで)が所持していたものである。維英の孫で、光彦氏の父である敬三が、辻本家二代目の豊三郎(福助社長、衆議院議員を歴任)の養子となった縁で、本ピストルは辻本家に伝来した。

維英は幕末期に撰関家である公家の一条家に仕えた。当時、一条家の娘が入内して明治天皇の皇后(昭憲皇太后)のこと。以下、皇后で表記を統一する)となった(2)。辻本家での言い伝えでは、維英は皇后を警護するために本ピストルを携帯していたとのことである。本稿では、本ピストルの銃砲としての特徴と、所持者・莊林維英の経歴について紹介する。

一 ピストルの現状

本ピストルは、アメリカのSmith & Wesson社(以下、S&W社と記す)が製造した二型アーミー(Model 2 Army)である(図1)。形式は、蓮根状の回転式弾倉を有するリボルバー(Revolver)である。全長二七・三cm。銃身長一五・四cm、銃身内径〇・七八cmである。三二口径(直径約八mm)の弾丸用であり、銃身内部にライフリングを有する。重さ六八〇g。材質は鋼鉄製とみられ、銃把は鍛鉄部を木部で挟み込み、ボルトで留めている。回転式弾倉には、弾丸が六発装填できる。



図1 Smith & Wesson Model 2 Army 全景

刻印が各所にある。銃身上面には「SMITH & WESSON SPRINGFIELD MASS」とあり、S&W社の所在地、アメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドを表しているとみられる。回転式弾倉の側面には、「PATENTED APRIL 3, 1855, JULY 5, 1859, & DEC 18, 1860,」とあり、後述するリムフアア方式の実包の特許期間に関するものとみられる。銃把の底部には製造番号とみられる「55770」の数字が刻まれている。銃身基部には「□都□



図2 壬申刻印



図3 弾丸袋

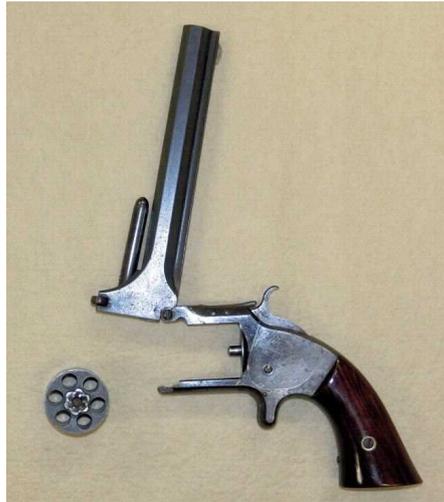


図4 弾倉を取り外した状態

壬申 五百五十六の刻印がある(図2)。これは明治五年(一八七二)に明治政府が制定した銃砲取締規則に基づき刻まれたもので、壬申刻印と呼ばれる。京都府による刻印と推定される。前年の廃藩置県を受けて、武器管理を強化するためのものである。革製ガマ口式の弾丸袋が付属する(図3)。本ピストルの保存状態は大変良好である。しかし、発射に不可欠な撃鉄が折られており、銃として使用することはできない。

二 銃砲史上における二型アーミー

日本の幕末期にあたる十九世紀半ばから後半にかけて、欧米では銃砲の技術が飛躍的な進化を遂げた。現在使用されている銃砲の基本技術の多くは、この時期に確立された。その一つに、実包(カートリッジ)の実用化がある。それまで、弾丸、発射薬、点火薬を別々に装填しなければならなかつたが、これらを薬莖(やつきょう)に収めて一体化した実包の登場により、装填時間が大幅に短縮された。

S & W社は、一八五〇年代初頭に、ホールズ・スミスとダニエル・ウェッソンによって設立された。同社は、一八五五年に特許登録されたリムフアイア方式の実包(金属製薬莖の底部にある、リムとよばれる張り出しの内部空間に点火薬をつめる)の特許権を取得した。そして一八五七年に一型の製造販売をはじめた。一型は、金属製薬莖の実包と回転式弾倉の組み合わせにより、連続射撃と再装填を繰り返し行える画期的なピストルであった。実用性が高く評判は良かったが、口径が二二口径(約六mm)と小さく、軍用としては威力不足であったため、さらに大型の三二口径の軍用ピストルとして開発されたのが二型アーミーである。

一八六一年に誕生した二型アーミーは、再装填の容易さと金属製薬莖による耐水性の高さにより実用性が高く評価され、同年に勃発したアメリカ南北戦争において将校用ピストルとして人気を博した(3)。

構造の特徴は、装填の際に銃身が上部に折れ曲がることである。再装填の手順は、①留め金を外し、銃身を上部にはね上げる。②回転式弾倉を外す(図4)。③銃身下部についている棒状のロッドで使用済みの薬莖を押し出す。④回転式弾倉に実包を詰め、銃本体に取り付ける。⑤銃身を元の位置に戻す。の以上である(4)。

S & W社の一型及び二型アーミーは、回転式弾倉と金属製実包の組み合わせにより、現在も使われているリボルバー(回転式ピストル)の技術確立期における傑作の一つとして評価されている。

三 日本における二型アーミーの使用例

二型アーミーが発売された一八六一年は、日本では文久元年にあたる。慶応元年(一八六五)に南北戦争が終了すると、アメリカで不要となった銃砲が大量に日本にもたらされた。二型アーミーも、この時期に数多く日本に輸入されたとみられる。

日本における二型アーミーは、幕末の志士・坂本龍馬が使用したピストルとして有名である(5)。龍馬は慶応二年(一八六六)一月二十三日、伏見の寺田屋において幕府の捕吏に襲われた。この際、龍馬が反撃に使用したのは二型アーミーとされる。龍馬は、同年一〇月に兄の坂本権平へ送った書

状に事件の詳細を記している(6)。その書状から、六連発の回転式弾倉(龍馬は「れんこん玉室」と記す)を有し、装填は弾倉を取り外して行ったことがわかる。これらの特徴から二型アーミーであったと比定されている。また、龍馬が同年二月六日付で長州藩の木戸孝允へ送った書状には「彼高杉より被送候ピストルを以て打払、一人を打たし候」とあることから、長州藩の高杉晋作から龍馬へ贈られたものであったことがわかる(7)。

前掲の兄・権平宛書状には、寺田屋事件において龍馬はピストルで捕吏へ向けて六発撃った。そして弾が無くなったため、回転式弾倉を取り外して再装填したが、既に左手の指を切られており、右手も痛めていたことから二発まで込めたところで弾倉を落としてしまった。足元を探してもすぐには見つからず、あきらめてピストルを捨てたとある。

他の日本国内の使用例としては、薩摩藩士が二型アーミーを手につけている肖像写真が現存している(8)。また、戊辰戦争末期に北海道の江差沖で沈没した旧幕府軍艦開陽丸の発掘調査では、複数の二型アーミーが出土している。

明治時代にも引き続き使われており、熊本城では、平成十五年(二〇〇三)に行われた本丸御殿復元事業に伴う発掘調査で出土している。これは熊本鎮台の将校が所持していたものが、西南戦争開戦直前の明治一〇年(一八七七)二月の火災により、天守閣や本丸御殿とともに焼け落ちて埋没したものと推定されている。また、明治四年(一八七一)から近代郵便制度が始まったが、当時は輸送の際に運送人を襲って郵便物を奪う事件がたびたび発生したため、明治六年から「郵便脚夫短銃携帯規則」を定めた(9)。そして「郵便物保護銃」と称して郵便物の運送人にピストルを携帯させた。主にフランス製が用いられたが、二型アーミーも使用された(10)。

以上のように、二型アーミーは幕末・明治時代初期には当時の最新式ピストルとして日本国内でも相当数が使われたと見られる。しかし、当館寄贈品のように所持者が判明し、かつ保存状態が良好な現存品は少ない。

四 荘林維英について

本ピストルの所持者であった荘林維英の経歴について述べる。荘林家は地下(昇殿を許されない官人で、通常は六位以下の者)の家である。『地下家人家伝』(以下、『家伝』と記す)では、荘林家は「一条家侍」の家で、

一条家から入内した恭礼門院(桃園天皇皇后)に仕え、寛政十二年(一八〇〇)に没した荘林維木から確認できる(11)。維英は維木から二代後にあたる。

『家伝』には維英の経歴が詳しく記されているので、それを抜粋する。「維英」故藤原維房男實清水一學源英則長男/文政十二年 誕生/嘉永五年正月十五日 爲養子/同日 家督 二十四歳/同日 近習席出仕 稱彈正/慶應三年九月一日 候皇后/同年十月四日 爲侍/同年十二月申従六位下攝津介小折紙/披露職事甘露寺頭左中辨勝長朝臣江被/附候處 王政復古御一新二付 宣下無之候事/明治 任宮内權少録/同 東京府貫属土族被仰付/爲家禄現米拾三石六斗下賜 但二代目ヨリ半減/同四年 免權少録/同年五月十三日 爲京都府貫属/同年七月廿四日 任京都府廳掌/同年八月 依願免廳掌/同年九月七日 土族閭長被申付/同八年十二月廿二日 華土族閭長被廢/同三十一年一月十九日 死号(以下空欄) 七十歳 同廿一日葬真如堂。

以上から、維英は文政十二年(一八二九)に生まれ、二十四歳の時に荘林家に養子に入り、家督を継いで弾正と称し、慶應三年(一八六七)九月一日に皇后に仕えたことがわかる。

皇后は、一条忠香の三女である(12)。嘉永二年(一八四九)の生まれで、慶應三年六月二十八日、明治天皇の女御に定まった。そして明治元年(一八六八)十二月二十八日に入内した。

江戸時代後期に京都で医者、儒学者、本草学者として活躍し、高槻藩臨時御用医を務めた山本亡羊の伝記には、「一条忠香公は今の皇后陛下の御実父にして本草学は特に御熱心なり。(中略)先生も亦屢参殿す。格別御優遇遊ばされ、時として御側にて酒饌を賜はらる。御近侍荘林彈正(維新氏の養父)曾て云、先生に酒饌を賜るとき、今の皇后陛下御幼年の時に御配膳遊ばされたることもありしと。」とある(13)。維英は維英の養子である(14)。また、『昭憲皇太后御一代記』によれば、当時、一条家には家来が四〇人ばかりいた。そして皇后は、幼少時にお茶とお花を床林彈正(ママ)に学んだとある(15)。これらから、維英は皇后の幼少時から近侍していたことがうかがえる。慶應三年に明治天皇の女御が定められた後、御付きの人々を選ばれた。一条家側の一人として、荘林彈正は「御内儀御取次」に任じられた(16)。

明治維新後、地下の家の多くは士族となり、官家士族とよばれた。荘林

家もその一つであった。維英は東京へ移り宮内庁に出仕した。明治三年（一八七〇）三月付の宮内庁の公文書には「皇后御所執次」とあり、引き続き皇后に近侍していたことがわかる（17）。同年十二月には、禄高が十三石六斗に改められている（18）。しかし、翌年の明治四年に宮内庁を辞し、同年五月に京都に戻っている。

維英は、皇后の入内前から入内後の明治四年まで近侍していたことがわかった。警護のために本ピストルを所持していたという辻本家の言い伝えは、当時の情勢を考えると、大いに考えられる。本ピストルに明治五年に刻まれた壬申刻印は、かすれているが、京都府のものとみられる。維英は明治四年に京都へ戻っており、矛盾はない。光彦氏からの聞き取り調査で得た情報は、本稿に記した以外の事項等も含めて、『家伝』等の資料から裏付けが取れるものが多く、確度の高いものであると判断した。

本ピストルは不明である。一条忠香の母は熊本藩主細川家の出身のため、幕末の一条家は細川家との繋がりが強かった。また、維英の養子・維新は宇土藩（熊本藩の支藩）の京都留守居の子である。そのため、細川家から贈られた可能性を考えたが、確証を得ることはできなかった。

明治四年に京都に戻った後の維英は、同年七月に京都府に出仕したが、翌月には辞している。その後、明治十三年（一八八〇）と翌年の上下京連合区会の議員名簿に維英の名前がある（19）。そして明治十六、十七年には同区会の議長となっている。当時の京都府政の最重要課題であった琵琶湖疎水事業実施について、維英は議長として北垣国道京都府知事に協力し、区民の同意取り付けに尽力した（20）。明治十九年に地域の民生を担う連合戸長に就いている（21）。そして明治三十一年（二八九八）、七〇歳で没した。官家士族の多くが困窮する中、要職を歴任した維英は、実務能力と人望を備えた人物であったと推察される。

おわりに

本稿では、当館に寄贈されたS&W社製二型アーミーピストルについて、銃砲としての特徴と、所持者・荳林維英の経歴を紹介した。二型アーミーは、銃砲の革新時期に登場した傑作で、幕末・明治時代初期に日本で多く用いられた。日本に現存する当該期のピストルの多くは、所持者が不明であり、日本にもたらされた時期も特定できない。そのため、所持者が判明

し、明治五年の壬申刻印を有する本ピストルの資料的価値は高い。今後は、展示等での活用していきたい。

最後に、本ピストルの寄贈者であり、多くのご教示をいただいた辻本光彦氏に深く感謝申し上げる。

【注】

- ① 本稿では、寄贈者である辻本光彦氏以外の人名については、敬称を略した。
- ② 左大臣一条忠香の三女で、幼名は勝子。富貴君のち寿栄君と称した。立后にあたって美子（はる）こと改名。
- ③ 高橋昇『世界のピストル図鑑』（光人社、二〇〇九年）。
- ④ チャック・ウィルズ『図解 世界の武器の歴史』グラフィック社、二〇一五年。
- ⑤ 国立歴史民俗博物館『歴史のなかの鉄炮伝来 種子島から戊辰戦争まで』（二〇〇六年）では、二型アーミーを「土佐の坂本龍馬が所用したものと同型の拳銃で、当時の日本では最新式のピストルであった。」と解説している。
- ⑥ 岩崎英重『坂本竜馬関係文書 第一』（日本史籍協会叢書、日本史籍協会、一九二六年）。
- ⑦ 前掲（6）に同じ。なお、坂本龍馬に贈られたピストルは、高杉晋作が文久二年（一八六二）に中国・上海に渡航した際に購入したものである説が広まっている。しかし、一坂太郎は「萩博覧会（萩博物館HP）の「ピストル考」において、晋作の上海土産説には確証がなく、文久久慶応頃、下関周辺で盛んに武器の密輸が行われていたことを指摘している。
- ⑧ 『洋泉社BOOK 別冊歴史読本』 図説幕末・維新の銃砲大全（洋泉社、二〇一三年）。
- ⑨ 『記録録編纂 明治六年 布告類 卷十二 郵便』（国会図書館デジタル収録）。
- ⑩ 郵政博物館（東京都墨田区）では、「郵便保護銃」として二型アーミーを所蔵している。
- ⑪ 『地下官人家伝』（京都府立京都学・歴史館蔵）は、天保十五年（一八四四）に成立した『地下家伝』を、大正時代に一条家に仕えた下橋敬長が補完したものである。荳林家は、巻二「下橋家資料二八四」に所載。
- ⑫ 一条忠香の政治姿勢は公武合体派で、徳川慶喜の夫人・美賀子は忠香の養女である。文久二年（一八六二）に新設の国事御用掛に子の実良らと就任し、翌年五十二歳で没した。
- ⑬ 中島民之介『山本亡羊先生小傳』（合資商報会社、一九〇九年） 同書によれば、山本亡羊は弘化元年（一八四四）三月に高槻藩の臨時御用医となり、月に一度高槻に出向いた。
- ⑭ 『家伝』に「藤原維英男美肥後国宇土城主細川豊前守京都邸留守居岡音五郎次男」とある。維新は『日本紳士録 第八版』（交詢社、一九〇二年）によれば、京都市助役を務め、上京区（現在は中京区）両替町に住んでいた。
- ⑮ 大日本実修女学会編『昭憲皇太后御一代記』（東京国民書院、一九一四年）。
- ⑯ 前掲（15）に同じ。
- ⑰ 「皇后御所執次荳林幸良外十一名改名届」（『公文録・明治三年・第四十六巻・庚午一月〜三月・京都宮内省伺』所収、国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番号公〇〇三六〇一〇〇〇）。これには「荳林幸良 弾正事」とあり、幸良は維英の前の名と思われる。
- ⑱ 「東京府士族ノ禄制ヲ改定ス」（国立公文書館アジア歴史資料センター、請求番号〇〇一七二〇〇〇）。
- ⑲ 京都市歴史資料館『近代自治の源流』（叢書 京都の史料一〇、二〇〇八年）。
- ⑳ 小林文弘『都市名望家の成立とその条件 市制特例京都の政治構造』（『ヒストリア』第一四五号、大阪歴史学会、一九九四年）。
- ㉑ 前掲（20）に同じ。

「摂州高槻絵図」に描かれた高槻城について

中西 裕樹

はじめに

平成二十九年年度に開催の高槻城築城四〇〇年記念特別展「天下泰平と高槻城」において、「摂州高槻絵図」（個人蔵。亀岡市文化資料館寄託）を展示した（図1）。以下「高槻絵図」と呼ぶ（1）。平成十一年に大山崎町歴史資料館が開催した企画展『西国街道と大山崎』において紹介され（2）、描かれた城郭部分が寛永十三年（一六三六）に高槻城主となった岡部宣勝が築造した「出丸」が未完成の時点を示す可能性が知られた。

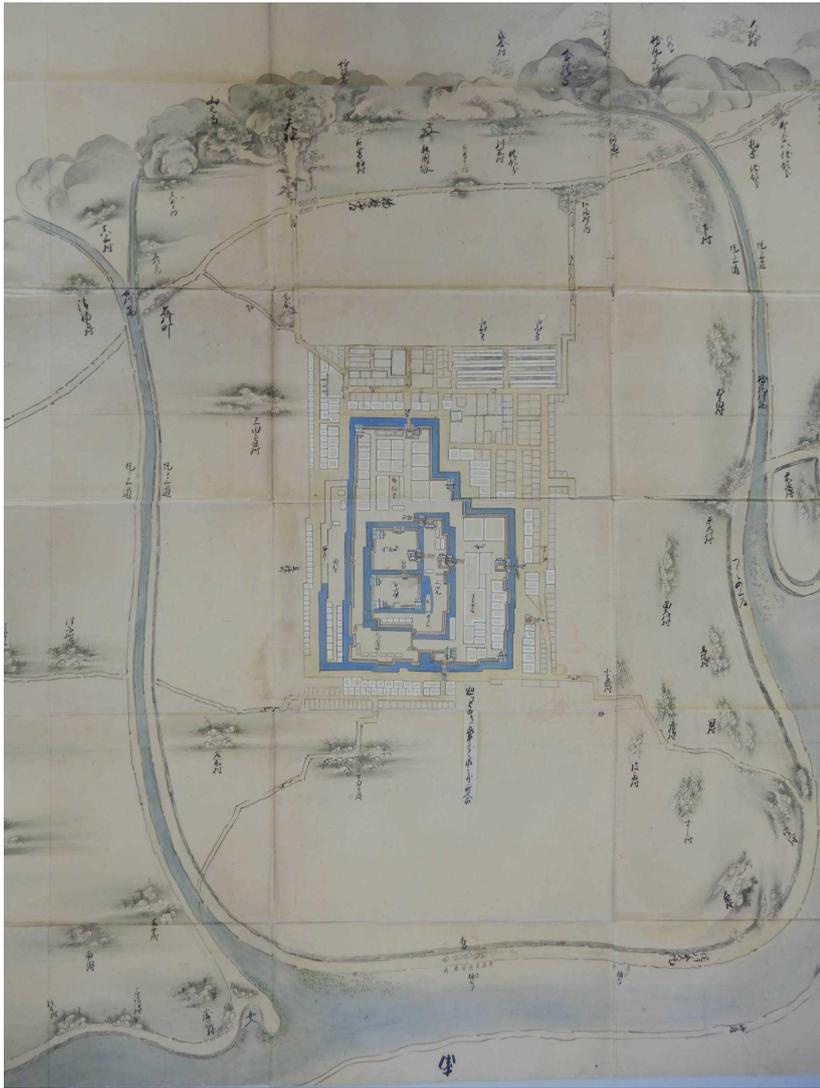


図1 「摂州高槻絵図」（個人蔵。亀岡市文化資料館寄託）

小文では、高槻絵図のうち、主に高槻城部分を取り上げ、描かれた情報を把握したい。

一 「摂州高槻絵図」について

高槻絵図は、縦一・二二・九cm×横一〇・五・四cmの法量である。折りたたまれて「摂州高槻絵図」との表題が記された袋に収納されており、裏面には同じ表題を記す付箋がある。

高槻絵図は、元和五年（一六一九）と寛永十七年（一六四〇）に高槻城主となった松平（形原）氏の家臣の家に伝えられた。松平（形原）氏は、後に篠山城主（兵庫県篠山市）を経て、龜山城主（京都府龜岡市）として明治に至る。このため、高槻絵図は京都府龜岡市に伝存する。

直接、製作された年代などが推定できる記述はない。ただし、先述のように寛永十三年（一六三六）に高槻城主となった岡部宣勝が従来の城の西側に増築した「出丸」に関する表現が興味深い。出丸西側堀の北側で水色の彩色が途切れた場所があり、「堀かけ」との付箋がある。

これが事実だとすれば、出丸が未完成の時点の高槻城を描き、現在把握している絵図の景観年代では最も古いものとなる。岡部宣勝は、寛永十七年に岸和田城主（大阪府岸和田市）へ転出し、代わって松平（形原）康信が高槻城に入った。同年には出丸は形になっており、康信の家臣が出丸の敷地となった土地年貢免除を高槻村の庄屋に伝達している（3）。

この経過をふまえると、松平（形原）氏は高槻城の支配を岡部氏から引き継ぐ中で、出丸築造途中の高槻城の絵図を入手し、この時点では完成に至っていなかったと見ることも可能である。景観年代としては、十七世紀半ば頃となる。

さて、高槻絵図は、高槻城と城下を中心に、東は檜尾川、西は芥川、北は高槻丘陵、南は淀川のおよそ高槻市域に収まる東西五km、南北六kmの範囲を描く。高槻城と城下には、顔料を使用した彩色が施され、各郭の形や街

区を平面で示しつつ、櫓などの建築物を立体的に描く。これ以外は、墨絵のような淡彩であり、高槻北部の山々や淀川などの河川と堤防、西国街道と城下へと至る道、集落などの景観を描く。

この表現の差が生じている理由は不明であるが、集落から城下へと至る道は、およそ同一の線、同じタッチで示され、両者を全く別のものとして描分けたものとは言い難い。ただし、城郭と城下を際立たせて強調する意図があったことは想定できるだろう。

なお、周辺の景観では、集落を半ば記号化するが、名所や高槻絵図で見られないような独自の情報を記載している。例えば、城下の北東方向にあたる西国街道北の山には「櫓尾薬師」との記述がある。これは江戸時代に徳川幕府が製作した「山崎通分間延絵図」にみえる養楽寺（現在は廃寺）の「薬師堂」にあたる。

現在、地元の方々が平安時代中期の薬師如来坐像（高槻市指定文化財、山手町自治会蔵）を西国街道沿いの堂に祀るが、ともに伝わる版木に「櫓尾養楽寺／春日大明神御本地」とある。このため、養楽寺は山手町（旧

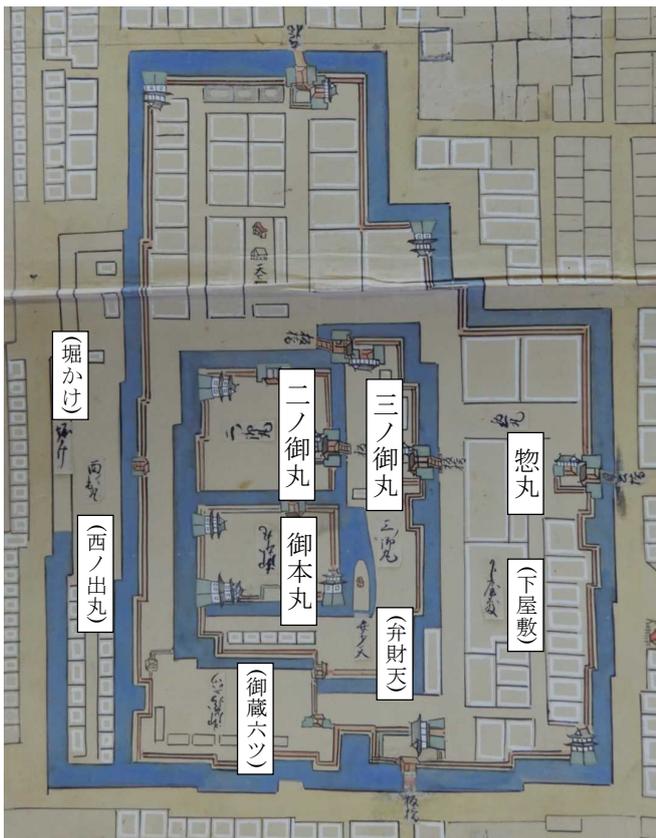


図2 「摂州高槻絵図」の城郭部分(加筆)

下村)の産土神である春日神社神宮寺であり、薬師如来坐像はその堂に祀られていたと考えられている(4)。高槻絵図では、この薬師如来坐像自体が著名な存在であり、さらに「櫓尾薬師」と呼ばれたことを伝えている。他にも、城下北西と西国街道の芥川宿を結ぶ道と北の上宮天満宮の参道との交点の「瓦屋」や、城下の東に位置する淀川の川港・前島を横断する一際幅の広い道、同じく唐崎には入江状の港湾が描かれるなど、地域史を考える上で興味深い多くの情報がある。詳細の検討は、今後の作業である。

二 郭の名称

まず、高槻絵図における城内の郭の呼称を取り上げたい。ここでは、「御本丸」「二ノ御丸」「三ノ御丸」「惣丸」「西ノ出丸」との記入がなされている。これらの呼称は、現在使っている郭の名称と一部異なり、「三ノ御丸」が「惣丸」が三ノ丸に該当する。ただし、高槻城の絵図を見る限り、これらの呼称は、時代を通じて必ずしも一定していなかったと考えられる。これらの呼称は、天保十一年(一八四〇)の年号がある「分間七百五拾歩壺高槻図」(個人蔵)以降の絵図で確認できる。一方、十八世紀前半頃の内容と推測される「町間入高槻絵図」(仏日寺蔵)では、高槻絵図と同じく「惣丸」を「三之丸」としつつ、三ノ丸にも「三ノ御丸」の文字を記載する。

十七世紀後半の「高槻城絵図」(仏日寺蔵)では、基本的に郭の呼称を記さないものの、高槻絵図「惣丸」の「下屋敷」の場所に「三ノ丸」の文字がある。また「惣丸」には「厩」の施設が確認できる。

さて、「惣丸」という表現は、惣構という都市構造の名称に近い。惣構(総構)とは、『日葡辞書』の「Sogamayé」の項目に「市街地や村落などの周囲をすっきり取り囲んでいる柵、または、防壁」とある(5)。この惣構は、戦国時代の大坂平野周辺で発達し、概ね慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦以降に城下町の類型として展開した。

高槻城の場合、すでに一五七〇年代の高山右近期に惣構構造の城下町が存在したと考えられる。惣構の範囲は明確にはできないが、当時のキリシタン墓地が三ノ丸で確認されたことや、惣構の痕跡や伝承が近世の城下域にみられないこと、豊臣期の城郭がおよそ二〇〇mの範囲に収まる傾向にあることなどから、三ノ丸の内部に収まるものと考えられる(6)。この理解は、考古学的な遺構の解釈からも指摘がなされている(7)。つまり「惣丸」の

範囲は、概ね戦国期の物構と重複する可能性があり、興味深い。なお、「町間入高槻絵図」では、高槻絵図に「御蔵六ツ」と記入された城域南端の蔵屋敷という郭に「惣構塀」としてその規模の記述がなされている(8)。

高槻絵図は、厩郭の名称が見られないこと、三ノ丸を「惣丸」とする点が大きな特徴である。この呼称を含め、高槻絵図は高槻城の古い様相を含む可能性がある。

三 城郭構造と建物

次に城郭構造と建物について確認する。先に紹介したような高槻城に関する絵図は、時期差を含み、町屋の配置、展開状況に差がある。また、精度や絵図の性格差もあって、郭の輪郭や規模などには大きな差がある。虎口周辺を仕切る構築物にも違いがある。ただし、高槻絵図では、他の絵図には無い特徴的な構造が見受けられる。

高槻絵図は、十七世紀半ばの景観年代の可能性はある。そこで、十七世紀後半の景観年代が想定される「高槻城絵図」(仏日寺蔵)とほぼ同一の絵図(しろあと歴史館A本)を比較の参考として取り上げていく(図3)。

一つは、本丸南側の堀の西側開口部を閉塞する土塁Ⅰが存在し、この閉塞部に接して本丸南西隅に三重櫓(天守)が存在する。高槻絵図以外の高槻城の絵図では、本丸南側の堀開口部を閉塞する施設は確認できず、天守は本丸内部に構築された天守台に建つ。

次に天守は、二層目屋根の西側に破風が描かれる。「町間入高槻絵図」では天守二層目屋根(南側)に破風を描くものの、他は絵図には破風などの意匠が見られない。また、本丸の北西隅と南東隅に二重櫓が建つが、高槻城の櫓は絵図の景観年代によって異なる(9)。改修などが加えられていた可能性も想定できるだろう。

また、本丸南の堀対岸の郭は、弁財天郭と呼ばれ、高槻絵図でも「弁財天」の文字がある。この一画が南に張り出す南西隅の虎口Ⅱは、「御蔵六ツ」とある蔵屋敷と地続きである。ただし、他の絵図の虎口Ⅱは、蔵屋敷の間を堀で隔てており、橋などもない。

さて、この違いが生じた理由について、単純な絵図の精度の問題、または想定される絵図の景観年代の差、つまり高槻城の変化を示すものとの推定も可能である。ただし、確定することは絵図だけの比較では困難である。

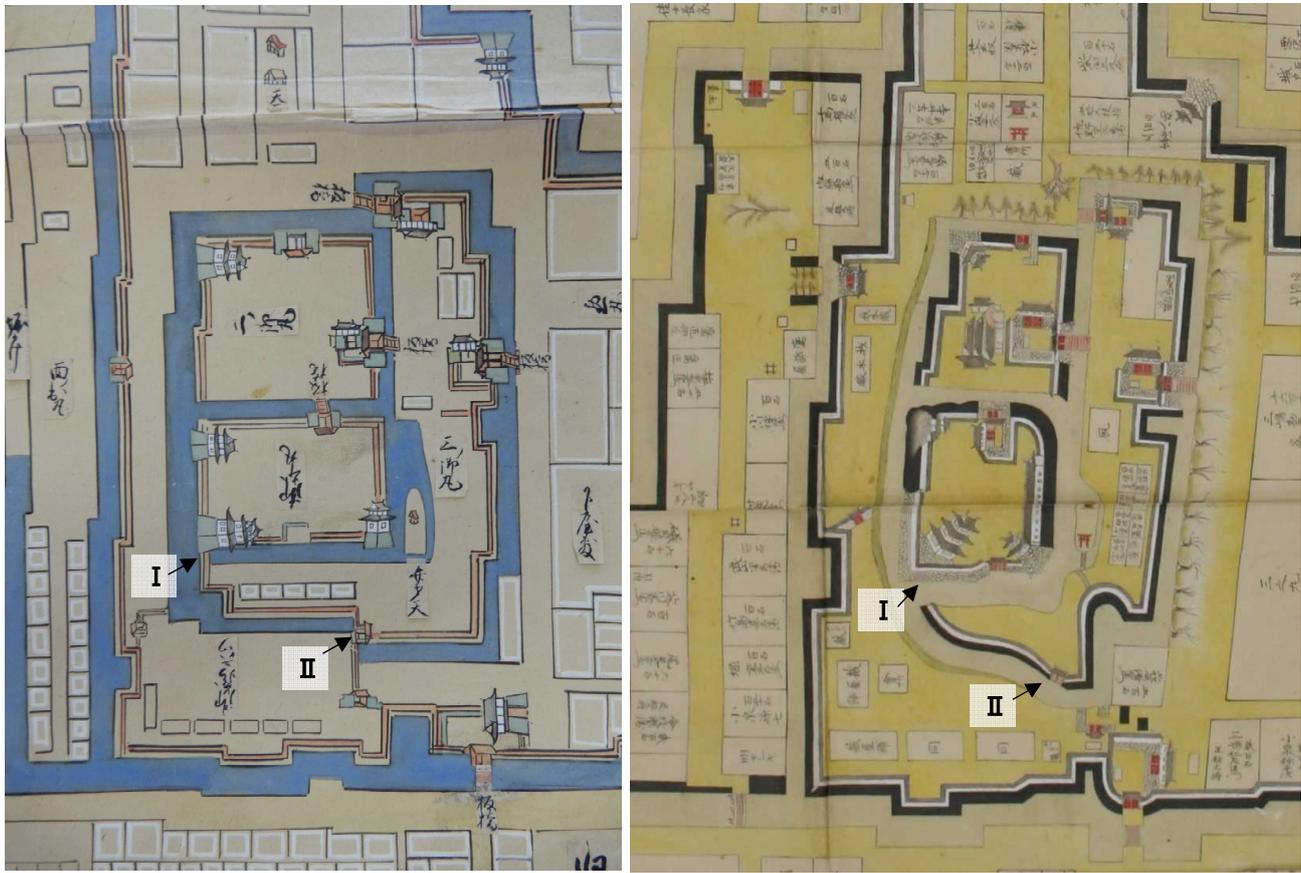


図3 「摂州高槻絵図」(左)と「高槻城絵図」(しろあと歴史館A本。右)の拡大(加筆)

そこで、城郭構造としての評価を他事例から紹介しておく。

土塁Ⅰのように、堀の開口部を閉塞する構造は、戦国時代以来の存在が想定されている。これを多田暢久氏は「開口部閉塞土塁」と呼び、城郭の曲輪配置が求心化を遂げる中で使用され、近世城郭にも事例があることを指摘している(10)。したがって、高槻絵図が描いた土塁Ⅰによる開口部閉塞は、荒唐無稽ではなく、存在し得た構造と見ておく必要がある。

同時期の事例、すなわち元和三年(一六一七)の高槻城公儀修築(公役普請)に続く翌年の尼崎城(兵庫県尼崎市)でも類似の施設が見出せる。河川に面して開口する二ノ丸と西三ノ丸間の堀、同じく松ノ丸と東三ノ丸間の堀は、その地点に木柵による水門が設置されていた。また、これらの南側の堀が開口する地点には木橋、土橋が設置されており、ともに開口部閉塞土塁に近い機能を持ったものと思われる(11)。

また、虎口Ⅱが蔵屋敷と堀を隔てず直結した場合、東西の仕切り堀と石垣、堀によって独立した空間である蔵屋敷は、変則的な馬出のように見えなくもない。一六〇〇年代以降、城郭構造は虎口空間の空間が連続する形で全体を構成するようになり、その際たる形が曲輪の馬出化であった(12)。高槻絵図の構造は、この流れの上で理解が可能である。

また、高槻城の場合、虎口は木橋を伴うものが大半であり、他の図では本丸、二ノ丸などの城郭中枢部から蔵屋敷へ向かう場合、厩郭(「三ノ御丸」)の北側虎口を経て、三ノ丸(「惣丸」)を南へ迂回する。蔵屋敷とは幕府御蔵であり、高槻絵図では城郭との強い結びつきを示している。

おわりに

前節で取り上げた高槻絵図の構造は、当時の城郭としてあり得るもので、中近世移行期の産物と言えなくもない。高槻絵図が描く高槻城の姿に不自然はなく、十七世紀半ばという想定年代とも乖離しない。この場合、高槻城には改修が重ねられ、それは作事だけではなく、普請面にも及んだことになるだろう。

慶安二年(一六四九)に永井直清が高槻城主となった二年後、直清は幕府老中に対して本丸檣台石垣・柵形(虎口)石垣・本丸南東門脇石垣、周辺(南辺)石垣の崩れ、本丸・二ノ丸・三ノ丸土居の崩れとこれに伴う檣・門の損壊を報告し、再築の許可を得ている(13)。高槻城の構造や建築物につい

ては、ある程度の変化を想定していく必要があるだろう。この点を考える上で、高槻絵図の持つ情報は、非常に興味深く、貴重である。

特別展の開催及びそれに伴う小文の作成に際し、所蔵者や亀岡市文化資料館の皆さまには多大なご協力とご理解をいただいた。あらためて深謝を申し上げる。

【註】

- (1) 中西裕樹『天下泰平と高槻城』(高槻市立しろあと歴史館、二〇一七年)所収。なお、小文で取り上げる高槻城関係の絵図の図版は本図録に収録している。
- (2) 福島克彦『西国街道と大山崎』(大山崎町歴史資料館、一九九九年)。
- (3) 『近藤家文書』「高槻町寛永十七年年貢引高之事」。「高槻町寛永十七年年貢免状」(註1文献)。
- (4) 西本幸嗣『人とほとのきずな 平安の名宝とさまざまな仏像たち』(高槻市立しろあと歴史館、二〇一五年)。
- (5) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳 日葡辞書』(岩波書店 一九八〇年)。
- (6) 中西裕樹『高槻城』(同『大阪府中世城館事典』戎光祥出版、二〇一五年)。
- (7) 森田克行『高槻城修築は「天下泰平」への布石』(註1文献)。
- (8) この蔵は、徳川幕府が設置した幕府御蔵のことである。詳しくは千田康治『高槻御蔵(二万石御蔵について)』(『しろあとだより』14 高槻市立しろあと歴史館、二〇一七年)を参照。
- (9) 中西裕樹「コラム 高槻城の天守と櫓」(註1文献)を参照。
- (10) 多田暢久「中世城郭における防御ラインの形成について」堀開口部の閉塞土塁を素材に、「『水野正好先生古希記念論文集 続文化財学論集』第一分冊 文化財学論集刊行会、二〇〇三年。
- (11) 江戸時代中期ごろとされる「尼崎城下武家屋敷一覽之図」(尼崎市教育委員会蔵)、享保元年(一七一六)作成の「尼崎城堀浚願図」(同前)などを参照(註1文献)。
- (12) 千田嘉博『織豊系城郭の形成』(東京大学出版会、二〇〇〇年)。
- (13) 「永井家文書」慶安四年九月二十五日付幕府老中連署状。

発行日 二〇一七年一〇月七日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

大阪府高槻市城内町一番七号・TEL 〇七二(六七三)三九八七

◆ホームページ：高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内掲載

http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishu_kanko/rekishu/rekishikan/chosa/shiroato/shiroato_dayori/index.html